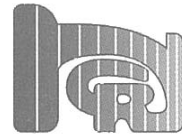


フィリア・レター

～真の友人からの手紙～



発行所:中部ろうさい病院

〒455-8530

名古屋市港区港明 1-10-6

TEL 052-652-5511

FAX 052-653-3533

<http://www.chubuh.rofuku.go.jp/>

今回は、前号でお知らせしましたとおり、東日本大震災における当院の第一次災害派遣医療チームの活動を、医師、看護師、薬剤師、作業療法士、事務員それぞれの立場から報告させていただきます。

医師の立場から

被災地での診療を体験して…

副院長 藤田 芳郎



2011年3月11日金曜日に発生した東日本大震災の第一次災害派遣医療チームとして、4月6日から4月9日の期間、事務、作業療法士、薬剤師、看護師、医師の各1名ずつの編成で仙台市の七郷小学校、七郷中学校、若林体育館の3つの拠点を中心に活動してまいりました。4月6日時点では、仙台空港が壊滅状態で使用できず、山形空港経由で仙台市に到着いたしました。仙台市の昼間は、一見名古屋と変わらない普通の都市でありました。目的地のひとつの避難所である七郷中学から800mほどのところに仙台東部有料道路が高台を形成して南北に走っております。有料道路の下を直角に走っている道路を潜り抜けた途端、あっと息をのむような光景に出合いました。瓦礫の山という日本語がこの震災で頻繁に使用されておりますが、まさに一面瓦礫だらけの風景が広がっており、さらにつきすすむと4-5kmで海岸となりました。その途中の海岸から300mばかり手前の荒浜小学校の中は軽自動車などが詰まっており、3階以上が無事だった様子が外側から見て取れました。小学生は無事だったであろうかと心配でたまらなくなり聞きまわりましたが結局正確な情報は確認できませんでした。有料道路が防波堤となりそれを挟んで海岸と反対側にある避難所の七郷中学校は、津波に対しては無事でしたが、地震で校舎の半分以上が危険な状態であるとのことでした。避難所に寝泊まりしている方たちは瓦礫となった地域にすんでいらした方たちでありました。

診察をしながらいろいろお話を伺いました。一人の腕利きの漁師さんのご夫婦のお話では、その瓦礫となった地域は伊達正宗が作った運河があるという歴史的にも古い地域であったそうです。高齢の漁師の父親をお持ちの娘さんは、父親の船が出てきたと親のために大変喜んでいらしゃいました。腹痛で受診された若い娘さんはご両親姉妹

を亡くされ天涯孤独になってしまったが何とか明るく生きていこうとすごしているとおっしゃってました。体育館で寝泊まりしている高齢のご婦人は数日間熱があって本日解熱剤を欲しいと依頼がありました。寝ていらしゃるところへ行って診察しますと肺炎であることが分かりました。近くの病院に受診していただきました。こんな感じで3つの避難所を2日間診療させていただきました。5名の医療団が一生懸命働き医療はチームであるということをもますます強く感じました。

2日目に診療後の11時半ごろには、突然震度6の地震に襲われました。震度6とは初めての体験で、鉄筋の病院の天井も落ちてくるのではないかとこれで行き止まりか、と一瞬心の中をよぎりました。

最後に、御苦勞の多い体験のお話を伺いながら診療をさせていただき感謝いたしますと同時に2日間でお会いした方々が今どうしていらしゃるかと思えます。それぞれの方が無事に健康を取り戻されていらしゃることを心から願わざるを得ません。と同時に震災がいつ自分の身に降りかかってきてもおかしくないという思いも強く感じました。そして今後の人類にとって原子力発電の問題が最大の問題のひとつであろうと思えます。

2011年6月27日



診療ブース